

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The influence of Japanese art on the German expressionist painter August Macke

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: FRANZ, Edgar メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1871

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ドイツ表現主義の画家アウグスト・マッケが 日本美術から受けた影響

Edgar Franz

1. はじめに

100年前、つまり1914年9月26日の第一次世界大戦の勃発直後、まだ27歳であったドイツの画家アウグスト・マッケはフランスのシャンパーニュ地方で戦死した。すでに、当時ドイツだけではなく、他国の美術界でも20世紀の美術の発展に大きな影響を与えた最も才能のある若い画家の死が悼まれた。

その後、多くの美術史家はヨーロッパの美術家がマッケにとってどれほど重要であったのかを分析していた。

しかし、アウグスト・マッケが日本の美術からも大きく影響を受けていたということは、最近まであまり知られていなかった。後にマッケの妻となったエリーザベトと、親友のフランツ・マルクとの手紙のやり取りや、マッケの作品の分析から、以前に考えられていたよりも日本の美術からマッケが影響を受けていたことが明らかになった。

2. アウグスト・マッケの生涯

アウグスト・マッケは1887年1月3日、メッセーデで生まれた。1897年、マッケはケルンのクロイツ・ギムナジウムに入学した。そこで、幼馴染みであり、後に画家の同僚となったハンス・テュアーと知り合った。ハンス・テュアーの父親は日本の木版画と水彩画のコレクションを持っていたが、若いアウグストはそれに感銘を受けた（Meseure 1993: 7）。

1904年、マッケが17歳だった時、デュッセルドルフの美術大学に入学するため、父親の意志に反してボン市にあるギムナジウムを退学した。学業と並行して、彼は舞台装置家兼衣装係としてデュッセルドルフの劇場で働きながら学業にはげんだ。

1905年、マッケはデュッセルドルフの夜間の美術実業学校に入学した。

1907年、彼は初めてパリへ旅行した（Kuhlemann 2014: 127）。そこで、マッケは日本美術と出会った。彼は日本美術を「素晴らしい」と表現していた（Delank 1996: 123）。ドイツに帰国後、彼はベルリンで画家のロヴィス・コリントの教室に通っていた（Kuhlemann 2014: 127）。

1909年、マッケはエリーザベト・ゲルハルトと結婚した。1910年の初め、マッ

ケはミュンヘンで初めてフランツ・マルクと知り合い、それから数年間、二人は緊密な友人関係にあった。マッケはしばしば旅をしたが、特に頻繁にパリを訪ねた。そこで、彼はロベール・ドロローネーやアンリ・マティス等多くのフランスの画家と知り合った。

1911年、マッケは芸術家集団の「青騎士」に入団した。年鑑『青騎士』のため、彼は『マスク』という論文を書いた (Lankheit 1979: 53-59)。1913年、マッケは展覧会「ボン市におけるライン川流域の表現主義者」を企画した。その後、マッケはスイスにあるトゥーン湖流域のヒルターフィンゲンに移った。そこで、マッケは画家のルイ・モワイエとモワイエの学友パウル・クレーに会った (Kuhlemann 2014: 127)。第一次世界大戦勃発直前、マッケが画家の親友たちクレーとモワイエとチュニジアへ旅行した時に作成した挿し絵や水彩画は、彼の画家としての創造的な頂点になった (Zentrum Paul Klee 2014)。

3. マッケの日本美術との初出会い

若い功名心の強い美術家のマッケは保守的な美術の作風に反対し、新しい刺激を歓迎した。特に1907年、マッケは日本美術に興味を持ち、深い関わりを持っていた。その年のパリ旅行の時、マッケは多くの美術館やギャラリーを訪問した。マッケは日本の美術作品が数世紀前のヨーロッパの傑作と同等の素晴らしさを持っていると感じた。そして、その日本美術からインスピレーションを受けた (Salmen 2011: 75)。

マッケは既成の絵画術を拒否し、彼にとっての指導的な絵画術を追及した。遂に、マッケは日本美術のほうが優れていると感じた。1907年10月のベルリン滞在時も、マッケは日本の木版画を扱い続けていた。彼は日本専門店で、北斎のスケッチブックに熱中していた当時、友人のエリーザベト・ゲルハルトの叔父であるベルンハルト・ケーラーはマッケに北斎の木版画が載っている数冊の本を渡した (Salmen 2011: 76)。その中には『北斎漫画』全15編があった (Heiderich 2014 : 41)。イザベル・ヘルダは、マッケがこのプレゼントにより、喜びでいっぱいになって、その後、彼の見方が根本的に変わっていったと書いている (Herda 2009: 43)。

ベルンハルト・ケーラーとの日本美術についての議論はマッケの創作意欲を刺激した。日本の表現様式は明らかにマッケの絵画術に影響を与えた (Salmen 2011: 76)。マッケは色彩に溢れた絵を好んで、またキュビズムや未来派から影響を受けたが、日本の絵の平面的な作画法の間接的な感覚を失ったことはない (Berger 1980: 313)。

しかしながら、筆者が2014年9月14日、ドイツのボン市にあるアウグスト・

マッケ・ハウス美術館を訪問した際、美術歴史家シュテファニー・ボルンハイム＝プラングは、マッケが1905年のイタリア旅行中に、ジョットのようなイタリアの巨匠の作品を取り扱った時、すでに平面的な作画法に興味を持つようになっていたと述べていた。

日本美術との出会いによって、マッケは新境地を開いた。クラウディア・デランクが書いているようにマッケは特に北斎の木版画に感動していた。装飾的な平面や立体感の無さは、マッケの物の精神とその物によって呼び起こされた感覚を描くことに適合した。マッケは日本美術を単に模倣しようとはしなかった。彼は日本の木版画から得た感動を自らの美術表現に変換した。マッケは具象画を描き続けた。彼は抽象画を目指すことはなかった。主要テーマは人間であった。彼は多くの人を平面的に暗示し、輝いている色で描いていた (Delank 2011a: 101)。

4. マッケの素描が日本美術から受けた影響 (1906－1909)

ウルズラ・ハイデリッヒは、マッケが10年足らずの創作期で作った素描は、彼の美術の中で重要な一部であったことを指摘している (Heiderich 1986: 7)。ハイデリッヒが1986年に出版した素描集にはマッケの171本の素描が載っている。

韓国人の美術歴史家ミョン・ソン・オーは『青騎士とジャポニズム』についての博士論文で、1906年から1909年にかけて、日本の木版画がアウグスト・マッケの素描に与えた影響を分析している。マッケが1906年に描いた素描『北斎画式 一葛飾北斎に基づいている素描』には視力障害者、釣り人や嵐の中の人々が様々な動きで描かれている (Oh 2006: 128, 図 225)。

北斎の木版画『ツル』には8羽のツルが描かれているが、1907年にマッケが描いたツルの絵の模範となった。マッケはこの北斎の作品に、ツルの姿の特徴が素朴でありながら、本質を把握する芸術だと感動した (Oh 2006: 131)。

ミョン・ソン・オーの博士論文の中には、マッケの一筆で描かれた挿し絵が載せていて、日本の美術作品と比較している。数羽のツルが強く制限された筆のタッチで描かれている。マッケは主な形と線で囲まれたツルの体をこの素描の中で描写しようとした (Oh 2006: 130)。それぞれの5羽のツルの大きさや筆致は異なっているが、統一されている姿勢を見ると、マッケは自分が意図した形を成就させようとしていたことが分かる (Oh 2006: 131)。

同年、マッケの絵『三味線を持つ芸者、隅田川での夏の宵』が制作された (Frese 1987: 436)。東京国立美術館の所蔵である鳥文斎栄之の木版画『三味線を持つ芸者』はその模範となった。マッケの絵には花等が追加されたが、鳥文

斎栄之の木版画での芸者は空白の背景の前に立っている。両方の絵には、濃い色の着物を着る日本人が絵の中心にいる。両方とも、芸者のなだらかな弧を描いている中軸は非常に似ている。マッケは鳥文斎栄之の木版画のすらりと長くのびた芸者の流れるような曲線を自分の絵に取り入れた (Oh 2006: 132, 図228)。

美術歴史家オーが書いているように、1907年の『女性ヴァイオリン奏者』の挿し絵も鳥文斎栄之の前述の絵のモチーフを示している。不自然に長く伸びた体やドレスの裾の皺の様子も鳥文斎栄之の芸者に似ている (Oh 2006: 132, 図228)。

マッケが1907年・1908年に描いた『日本の踊り子ハナコ』では日本の木版画を模範としなかった。この絵を描くために、花子 (本名 太田ひさ) という実際の日本人がモデルを務めた。彼女は彫刻家オーギュスト・ロダンのモデルも務めたこともある。エドゥアール・マネや他のヨーロッパの画家と違って、マッケは着物を着るヨーロッパ人を描こうとは思わなかった。マッケの絵で若い女性が床に座っている。髪が結い上げられていて、着物を着て、微笑みながら、彼女の前にある小さなテーブルの上の鏡を見ている (Oh 2006: 133, 図228)。

美術歴史家オーによると『座っているアラブ人』という鉛筆と木炭の角ばった強い線で描かれた1914年のマッケの絵も日本の木版画から影響を受けたと推測されている (Oh 2006: 133, 図229)。マッケは芸者やツルの流れるようなすらりとした形だけではなく、日本の男性の角張った強い線の描写も使っていた (Oh 2006: 134)。

筆者が2014年9月15日、ボン市立美術館の学芸員フォルカー・アドルフズにインタビューした際、彼は日本美術がマッケに与えた影響を認めたが、相対的に見るとヨーロッパの美術家からの影響のほうがはるかに大きかったと述べた。アドルフズによると日本の美術様式よりも「日本のエキゾチックな輝き」がマッケにとって特に重要であった。

5. マッケの油彩画と水彩画が日本美術から受けた影響

素描だけではなく、アウグスト・マッケが1913年から1914年にかけて制作した油彩画や水彩画に日本美術からの影響が見られる。マッケの油彩画でその影響が見られる三つの例を以下に記す。一つ目はマッケの有名な1913年の絵画『森の道を行くカップル』で、デュイスブルク市のレンブルック美術館の所蔵である。この絵画に描かれているカップルは分岐点に差し掛かっているとレナーテ・ハイト＝ヘラーが書いている。足は左を、上半身は右を向いている。このカップルは完全に背景の自然と融合している (Heidt-Heller 2000: 29)。

日本美術がマッケの油彩画に与えた影響が見られる二つ目の例は『散歩道』(1913年)である。この絵画はミュンヘンのレンバッハハウス美術館の所蔵である(Zweite 1991: 101)。公園の風景の真ん中に一人の女性が立ち、白い日傘をさしている。

彼女の隣の一人の男性は麦わら帽子を被って、頭を軽く傾けて、木の幹に寄りかかっている。その2人の体の輪郭は単純であり、流動的、その上、画一的である(Oh 2006: 134-135)。

三つ目の例はミュンヘンのレンバッハハウス美術館の所蔵であるマッケの油彩画『トルコの喫茶店』で、日本美術の影響を受けた平面的な構成で描くことによって、純粋な色彩の力が発揮されている(Düchting 2009: 86)。

1914年のチュニジア旅行中や、その後思い出に基づいて描いた167点の素描と38点の水彩画のいくつかの作品の中でも(Kuhlemann 2014: 150)、マッケが日本美術から受けた影響が見られる。例として、1914年の水彩画『小路の眺め』が挙げられる。この作品はミュルハイム市の美術館のツィグラー・コレクションの所蔵である(Kuhlemann 2014: 151)。

油彩画『森の道を行くカップル』と油彩画『散歩道』と同じように、水彩画『小路の眺め』も、マッケが日本美術を模範にし、自分の絵画様式に変化させた二つの要素を持っている。『三味線を持っている芸者』のような日本の木版画で見られる長くのびた姿態を、マッケは自分の女性の肖像画に取り入れた。マッケはこれらのしなやかな体の輪郭の姿を日本美術の影響を受け、ツルの素描を描き、練習した(Oh 2006: 135)。

6. アウグスト・マッケのエリーザベトとの手紙のやり取り

1905年から1907年にかけて、友人であって後に妻となるエリーザベト・ゲルハルトに当てた手紙の内容から、アウグスト・マッケがどれほど日本美術に影響を受けていたかが分かる。1905年、マッケはエリーザベトに美術アカデミーよりもデュッセルドルフの工芸専門学校からのほうがより多くのインスピレーションを受けることができると次のように書いていた。「学校の授業形態は日本的だと感じる。全ての技術を自由に使える。粘土の塑造、カッティング、エッチング、彫刻、石版画、蔵書票などの制作ができる。例えば、金魚鉢を自分の前に置いて、描く。大学で描くことを学ぶことは必ず役に立つが、理論だけでなく、実物の生きている姿を描くのが良い」(Delank 2011b: 96)。

エリーザベトは自らの回想録でマッケについて次のように記している。「生気のない大学の無用な学習より、工芸学校での自由な作業、また生き物、植物、動物を日々に扱うことは、彼にとって大いに役立った。日本美術を気に入り、

広重や北斎の繊細な木版画、また日本の美術家が動物や鳥を装飾や模様として扱うことに感動していた」(Erdmann-Macke 2013: 82)。

1905年、ベルンハルト・ケーラーから北斎の木版画が載っている本をプレゼントしてもらった後、マッケはエリーザベトに手紙で次のように書いた。「それで、私たちは彼のスケッチブックを観賞した。それらの本は全て木版画だった。この愛らしい女性たちの数百にも及ぶ繊細な素晴らしい動き、とにかく全て…深夜3時まで、この本を手にとって、興奮したので眠れなかった」(Delank 2013: 76)。

1907年5月16日、マッケはエリーザベトに手紙で次のように書いた。「私は何度も日本の花のついている枝を見つめる。分かるだろう？あの木版画に描いてある灰色のものだ。それは本当に素晴らしく、敬虔な作品だ。この小さな物を観ると、何千もの人々が身を乗りだして、恍惚な表情で前に立つヨーロッパの絵より、それ以上に美術の力が籠っていると感じる。この美術の力を一度認識すれば、世界が広がるという不文律がある」(Salmen 2011: 75)。

その数週間後、つまり1907年7月25日、マッケはパリからエリーザベトに手紙で次のように書いている。「日本画を学んでも、ヨーロッパ人の顔に日本人の目を描く必要はないと思う。日本人は素晴らしいと思わないか？例えば、オベルニール美術館の絵を観てから、日本人の絵を観てごらん下さい。日本画の様式はとても説得力があるのに対して、美しく整ってはいるが、顔の表面を油で塗っただけのヨーロッパの絵にはぞっとさせられ、背を向けたくなる」(Salmen 2011: 76)。同年、日本美術に対して感動していたマッケは、バーゼルからエリーザベトに宛てて、学校に通っていた頃から感銘を受けていた画家アルノルト・ベックリンの絵は、今では彼にとって重要な意味を成さないことを次のように書いていた。「彼の全ての絵はあまりにも大げさで、不自然で、目障りな色で描かれていると感じる。バーゼルにあるベックリンの全作品より、私が持っているたった一つの日本の木版画のほうがずっと好きだ」。日本の木版画の中に、マッケは新しい世界観を発見した。偉大な日本人の美術家たちはマッケに影響を与えた(Erdmann-Macke 2013: 345)。

1907年11月6日、マッケはエリーザベトに次のように書いた。

「私は今、日本人の作品を模範にして、君の叔父さんが贈ってくれた筆で描いている。日本の木版画についての講演を聴くため、7時半に日独協会に行かなければならないので、今は30分ほど休息したい。今、ベルリンはかなり霧がかかっているので、ひと時の間、こんなきれいな日本の風景を見られるのは嬉しいことだ」(Salmen 2011: 76)。

7. アウグスト・マッケとフランツ・マルクの手紙のやり取り

1910年1月6日、フランツ・マルクとアウグスト・マッケはミュンヘンの美術品店ブラケルで知り合った。その時から、似たような考え方を持っている若い二人のドイツ人の画家の間に交友関係が深まった。二人の日本美術への関心はその親密度にとって重要な役割を果たしていた。1910年からマッケとマルクは多くの手紙のやり取りをしたが、それらの手紙には2人の日本美術、特にエキゾチックな木版画への愛着が表現されている (Delank 2011a; 89)。

この手紙のやり取りは、1964年にヴォルフガング・マッケによって出版され (Macke 1964)、日本美術についての2人の見解のやり取りが明らかになる。

マルクはマッケにミュンヘン市の美術商人プロヘレツキーを紹介した。プロヘレツキーは日本の小工芸、ブロンズ、根付や木版画の商取引をしていた (Macke 1964: 235)。

ブリギッテ・サルメンは親友の画家であるマッケとマルクの手紙のやり取りを分析した。サルメンによる日本美術、つまり木版画や他の美術作品との関わりが二人の間に大きな役割を果たし、しばらくは、二人の話題になる可能性があった (Salmen 2011: 79)。

1910年12月、マッケとマルクは手紙で、二人が好きな日本の木版の春画について意見を交換した。1910年12月9日、マッケはボン市からマルクに次のように書いた。「現在、私は日本のエロチックな絵について考えを巡らせている」 (Macke 1964: 27)。

1910年12月26日、マッケは画家アンリ・マティスとその色彩論をテーマについて数枚に及ぶ手紙で次のように書いた。「日本人は筆できれいに文字が書けるので、絵を描く時にも筆で感情を表現することが得意だ」 (Holzinger 2014: 25)。

ボン市のゲレオンス・クラブで講演した際に、マッケは自分の作品への日本美術の意義を強調し、講演の最後に日本語で話し始めた (Salmen 2011: 78)。

江戸時代、風景画や女性の肖像画等と並んで、春画は大量に刷られ、ヨーロッパへ輸出された。しかし、マッケは日本の美術作品だけではなく、日本文化全般に感銘を受け、日本の演劇も好んで鑑賞し、日本の挨拶表現を使っていた (Oh 2006: 129)。

8. おわりに

学生時代に、アウグスト・マッケはすでに日本美術を取り扱っていた。マッケの日本美術に対する愛と感動は、若くして亡くなるまで続いていた。マッケの書き残した遺品の記録の分析、特にエリーザベトが友人であり、後に婚約者

となり、妻となった彼女との手紙のやり取り、また友人の画家フランツ・マルクとの手紙のやり取りを見ると、マッケがどれほど日本美術と関わっていたかが分かる。マッケは、日本美術家、特に北斎や広重らから画法や美術的認識に大いに感銘を受けた。日本美術がマッケの作品、つまり彼の素描、水彩画や油彩画に及ぼした影響に注目すべきである。

参考文献

- Berger, Klaus (1980): Japonismus in der westlichen Malerei 1860-1920. Munich: Prestel Verlag.
- Brockhaus, Christoph (ed.) (2000): Wilhelm Lehmbruck Museum Duisburg, Munich: Prestel Verlag.
- Delank, Claudia (1996): "Japanbilder". Vom Jugendstil bis zum Bauhaus. Munich: Iudicium.
- Delank, Claudia (2011a): Die Japansammlungen der Maler des Blauen Reiter und ihr Einfluss auf die Malerei. In: Schlossmuseum Murnau (ed.), pp. 89-95.
- Delank, Claudia (2011b): Die Maler des "Blauen Reiter", die Rheinischen Expressionisten und Japan. In: Schlossmuseum Murnau (ed.) pp. 96-102.
- Delank, Claudia (2013): "Mit Heuschrecken und wildem Honig" Der Blaue Reiter, das Junge Rheinland und die Rezeption der japanischen Kunst. In: Mae, Michiko (eds.): Nipponspiration, Cologne, Weimar, Vienna: Böhlau, pp. 71-91.
- Düchting, Hajo; Wolf, Norbert (ed.) (2009): Der Blaue Reiter, Cologne, Taschen GmbH.
- Erdmann-Macke, Elisabeth (1962/2013): Erinnerung an August Macke. Frankfurt: Fischer.
- Frese, Werner; Güse, Ernst-Gerhard (1987): August Macke, Briefe an Elisabeth und die Freunde. München.
- Heiderich, Ursula (1986): August Macke, Zeichnungen aus den Skizzenbüchern. Stuttgart: Gerd Hatje.
- Heiderich, Ursula (2014): August Macke, Franz Marc und die kunsthistorische Tradition. In: Adolphs, Volker; Hoberg, Annegret (eds.): August Macke und Franz Marc. Eine Künstlerfreundschaft, Kunstmuseum Bonn: Hatje Cantz, pp. 38-57.
- Heidt-Heller, Renate (2000): Paar auf dem Waldweg. In: Brockhaus, Wilhelm Lehmbruck Museum Duisburg. Munich: Pretzel Verlag, p. 29.

- Herda, Isabel (2009): Konstante Kandern-August Mackes Besuche bei seiner Schwester Auguste. In: Kunsthaus Stade (ed.), August Macke-ganz privat, Wienand GmbH, pp. 31-45.
- Holzinger, Michael (ed.) (2014): Franz Marc, August Macke. Briefwechsel 1910-1914, Berlin.
- Kuhlemann, Michael (2014): Expressionismus und Klassische Moderne, die Sammlung Ziegler, Munich: Hirmer.
- Lankheit, Klaus (ed.) (1979): Der Blaue Reiter. Munich: R. Piper & Co.
- Macke, Wolfgang (ed.) (1964): August Macke/Franz Marc Briefwechsel, Cologne: M. DuMont Schauberg.
- Mae, Michiko (eds.) (2013): Nipponspiration, Cologne, Weimar, Vienna: Böhlau.
- Meseure, Anna (1993): August Macke (1887-1914). Cologne: Taschen Verlag.
- Oh, Myung-Seon (2006): Der Blaue Reiter und der Japonismus, Munich: Dissertation.
- Salmen, Brigitte (2011): Die Maler des Blauen Reiter und ihre Begegnung mit japanischer Kunst. In: Schlossmuseum Murnau (ed.), pp. 69-88.
- Schlossmuseum Murnau (ed.) (2011): Die Maler des Blauen Reiter und Japan. Munich: J. Gotteswinter GmbH.
- Zentrum Paul Klee, Bern (2014): Die Tunisreise 1914, Paul Klee, August Macke, Louis Moillet, Ostfildern: Hatje Cantz Verlag.
- Zweite, Armin; Hoberg, Annegret (eds.) (1991): Der Blaue Reiter im Lehnbachhaus. Munich.



ボン市にあるアウグスト・マッケ・ハウス美術館



アウグスト・マッケ・コレクションを所蔵しているボン美術館